

かたことの系譜 (その一)

(付) 貞室 (正章) 年譜

白 木 進

(以下「かたこと」が書名を指す場合は、かたことと書く。)

一、かたこと

安原貞室著 五卷五冊 800条 慶安3 (1650) 刊。この書に収められた「ことば」の時代を顧ると、一〇一年前の天文18年 (1549) はフラシスコ・サビエルが始めて鹿児島に上陸した年、そして五〇年前の慶長5年 (1600) は天下分け目の関が原の戦があった。かたことはこの様な時代の、京ことばの記録であり反省録である。全篇800条は長短とりどりの文より成る覚え書で、叙述の形式は、

(標準語) A (といふべき) を B (かたこと) (評定) (といふ) は C (よろし)

の形をとる。

例 50条 一 中興を。ちうこは如何。……

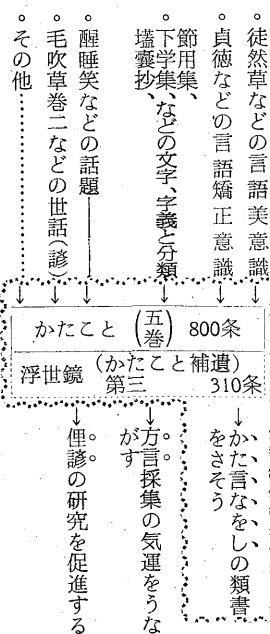
A に当る所は、漢字なら必ずフリ仮名を施し、B におく「かたこと」は大抵かな書である。いづれも発音面を重視した表記と思われる。C の評定もなか／＼面白く、その後が続く著者の意見 (序文という所の「今案」) も興味深いものがある。語学書であり

かたことの系譜 (その一) (付) 貞室 (正章) 年譜

固い内容であるに拘らず世に受けたと見え、36年後の貞享3年 (1686) に、同じ書名、同じ版で後刷本の第二版が出ている。今、かたことの内容系統を左表の如く想定し、今回は枠で囲んだ部分を「かたことの系譜」(その一)として述べる。

○かたことの内容系統

前駆 ↓ かたこと ↓ 後世への影響



二、かたことの直系

1、かたことを抜萃した書

(4) 浮世異竹 (内題 当世嘉多言浮世異竹、但し第一、三冊は浮世、

第二、四冊は憂世の文字を使う。案ずるに俚言集覽にいう、「浮

世といふに二ツあり一は憂世の義、此ハ常也一は風流ハヤリ遊里

の事など云さまの意也」と。) 三卷四冊 (下巻を二冊に分く)

藤氏松月編 貞享5 (1688) 刊。(伊勢市の神宮文庫蔵。)

序にいう、…爰に貞師正章の嘉多言双紙こそ宜にいみじふかきて

いとおかしければ板行のすたれるを惜むこゝろに浮世異竹と名付

代々のむかしを忍びていまあづさにちりばめ云々

上巻はかたことから先ず19 15 16 17 18 5、以下は順に1 絵 2 3 4 と

引き、116 条までから86 条を抜萃する。

中巻は625 条までから196 条を、

下巻は800 条までから54 条を、合計336 条を抜萃したもので、各巻に

挿絵二葉ずつが入る。

当世利口誠草 (内題 まことぐさ) は(4)の改題本で同じく三巻。

元禄5年 (1692) 刊で (江戸) 日本橋一萬屋清四郎版。いま、国会

図書館本 (合本一冊)、天理図書館本 (合本一冊) などあり。

当世大和言葉 (又は当世大和詞大全) は又その改題本。三巻

享保5 (1720) 刊。諸版あり、当時広く行われたのであろう。

(向)かたこと百廿七条 (国会図書館蔵) 刊本一冊で、始めから「なに

はおそまきはなしのたね」、「男女いろは状」と合刻している。

刊記なし。「なにはおそまきはなしのたね」の中の話題から推し

て、貞享・元禄頃の刊か。

版本の版心に一カ所だけ「さうしや久兵衛板」の文字がある。

かたことを中心に120 方条の「かたこと」を採録しているが、但し

一 萬かたことそろへ

一 ひく事をひかずひかざる事をひくかたこと

一 うのじをのけておのじを入ルかたこと

一 つめざる事をつめていふかたこと

一 はぬる事をはねぬかたこと

一 はねぬ事をはぬるかたこと

一 五しきのほめやうにしだいある事

の如く分類し、かつ文章も七五調に編成替えている。

例 さんせんなどをさいせん (かたこと168 条) とはねずに人のい

ふぞかし

右の様に、類別してかたことを並べる型は、後世にも丹波通辞 (岩

瀬文庫蔵) などが採用している。

例 一 はねへきをはねざる 大根 だいこ

一 はねましきをはぬる 正月をしよんかち

2、かたことの補遺

浮世鏡 第三 (零本、天理図書館蔵) 貞享5 (1688) 刊。

(浮世鏡 第一) の書誌や内容については前稿「かたことの補遺とい

われる浮世鏡 第三 (参照) 序にいう、

……さきに俳諧師貞室が片言の書五冊をあみて世におこなひぬ。

これにもらしたるをかき侍ればさらにひとつ事にあらず。此故に

是にもれたるは彼書にありと知給ふべし。云々

とあり、自らかたことの補遺たらんと目指した著述の如くであるが

両者を比較すると、先ず叙述の形式が逆である。例えば

(イ) 84 ほしいと 陪堂也 乞食(浮世鏡第三)
 右における (a) はかたこと、(b) はその正言、(c) は説明である。

(ロ) 201 きりもの衣服 ــــــــ (浮世鏡第三)

浮世鏡 第三は先ず (a) かたことをあげ、次に (b) 標準語を示して之を直す「かた言なをし」の形をとるので、
 余り必要でなくなり、勢い (c) では判定語を欠くことが多く、有る場合も説明語となり勝ちなのである。(ロ)の例はかたことの、

352 外家の衣類を きりものといふべきを きりものといふこと
 然るべからず

と内容的には一致する。「これにもらしたるをかき持ればさらにひとつ事にあらず」と序で述べているに拘らず、内容的にかたことと重複する条は調査すると合計95項に達する。表示すると、

浮世鏡 第三	かたこと
第1条	第605条
第2条	第600条
(略)	
第308条	第46条
計95項	

全篇310条のうち、実に三分の一に近いものがかたことの影響を受けた模倣した形で重複している。(前稿かたことの補遺といわれる浮世鏡 第三について) 164頁)

模倣と言え、既に指摘した如く篇目に於ても、篇目名称や篇目数がかたことの踏襲であったが、版型の面でも横長小型本であること

かたことの系譜(その一)(付)貞室(正章)年譜

と、完本は五巻五冊であることも一致する。

浮世鏡 第三にみる評定語

かたことが 正言^A かたこと^B 評定^C の型式で叙述するのに、浮世鏡 第三は正言―かたこと の位置が逆であると述べたが、

105 かん^(a)のし 神主也 ــــــــ (c)

106 ばん^(a)じよ 大工 番匠也^(b)

106の場合 (c) が前に来ている。いずれにせよ (b) で訂正し、「かた言なをし」の形をとるので、勢い (c) は之を欠いだり、あつても説明となり終ることが多い。

尤も浮世鏡 第三にも

90 そなたといふべきを すなたは ひが事なり

の如く、かたことと同順の条もあり、又かたことに倣つて評定を下している条も若干ある。いま全篇310条の中で、評定のあるものを分類し表示すると、

1、是とするもの……………1条

73 京の人の下人にむかひて「あがみ」といへるは「我身」といへる事の誤成べし。と或田舎人のいへり。尤聞えたる不審ながら、是はよき詞成べし。尤我身といふ事也

2、否とするもの……………46条 その表現は

ひがごと 80 85 87 90 140 270

いらす いらぬもの 72 77 79 138

誤 13 73 88

いふまじき(詞) 74 258

重言 77 79 101 203 210 220 221 223 310

不礼のことば 102
 下劣やかち 115 258
 下品の族やからの称 70
 いやし いやしきことば 130 235 236
 おかし 70 74 128 222 253
 取違ちがひにや 243
 つたなし 244
 片言 258
 いか成事にや 232
 俗説也 51
 田舎の下輩の詞 89
 京の下輩の詞 115
 如何 100
 あたらぬこと 140
 田舎・田舎の民 86 306

浮世鏡第三のあげる「かたこと」の内容一覧

分類	例	該当条項
促音訛	冒頭篇目 めんしよ 名所也	2 12 15 18 21 29 32 33 36 49 87
82 こつちやう といふ儀にや 功 <small>こう</small> 長 <small>ちやう</small>		209 91 2 88 94 12 206 237 98 15 222 250 99 18 226 284 108 21 265 289 125 29 278 291 157 32 280 169 33 305 181 36 191 49 205

中下略	下略	中略	上略	清音訛	濁音訛	直音訛	拗音訛	短音訛	長音訛 (後をひく)
3 9 43 うんりんいん 雲林院也	4 あぐ井 安居院也 あぐいん	28 じやこじ 寂光寺也 じやくくわうし	216 ゑ家 いえ也	6 しつはら 静原也 しつはら	112 だれぞ 誰ぞ也 たれ	40 かんぱく殿 閑白殿也 くはんぱく	20 ちやうにん 智恩院也 ちおん	16 ごこまち通 御幸町通也 ごからう	270 野といふをのう じゆらく 聚楽也
102 3 123 13 145 38 183 41 184 44 193 69	4 68 89 92 99 100	182 3 195 20 198 28 199 86 200 96 208 114 259 137 261 151 276 153 282 163 175	216	6 112 116 149 173 239	40 50 63 65 66 80 97 214 247 292	20 64 75 140 148 228 263 266 272 281	217 108 16 219 109 35 248 110 37 264 112 45 277 116 47 287 136 62 154 70 177 71 188 84 197 106 212 107	270 249 1 252 19 260 26 270 42 288 55 290 57 76 109 167 189 213	

かたことこの系譜(その一) (付) 貞室(正章)年譜

母音 交換	字音 ヨミ	類字	語の使 い方	上下同じ のもの (誤か)	他語に よる	付けたる ことば ・文字・音
i ↓ o ↓ e ↓ u ↓	244 あとげつ 跡 <small>あとのつき</small> 月	118	258 新米	194 くはつろうこん つろうこん 活蔓根 <small>くは</small>	235 よなきもと ばんもと	下に 母音添加 245 ぼに 盆 <small>ぼん</small> 子音添加 233 いらやひ りあひ
168 178 294 295 7 17 22 120 131 135 141 142 144 160 162	244	118	258	194	60 172 176 225 232 235 268 269 308	31 245 202 233 236 273 299 304 307 46 54 72 85 120 122 127 138 180 196 223 24 25 126 146 158 179 201 227 231 283 302

母音と との 交換	子音脱落 と n	母音と との 交換	子音脱落 と n	転音 交換節	子 換 音	母 換 音	
i ↓ n ↓ n ↓ i ↓ o ↓ u ↓	n ↓ n ↓ n ↓ u ↓	73 あがみ わがみ は我身……	73 あがみ わがみ は我身……	14 23 54 67 78 126 132 133 274	その他 m ↓ b ↓ m ↓ n ↓	a ↓ e ↓ e ↓ o ↓ i ↓ e ↓ u ↓ o ↓ u ↓ i ↓ u ↓ o ↓	
260 300 306	48 68 211	23 296	111 242	73	14 23 54 67 78 126 132 133 274	267 271 285 293 298 95 121 170 256 298 47 79 134 152 171 8 52 139 297	301 246 238 166 240 275 150 (174) 257 155 255 126 190 113 141 53 128 185 11 81 98 104 143 215 229 251 279 286 167 187 192 204 254 262 147 159 161 164 165

連声	30 あんにようじ 安養寺也 <small>あんようじ</small>	30 34 61
重言	77 おほ大名 上のおほの字 いらす	(72) 77 79 101 203 210 220 221 223 310
和尚の ヨミ方		70
敬語の 使い誤り	(相手による)	74 102
文字の 訂正	117 三談といふは…密談なり	117
ことば	播戸の— 津国・播戸の— 大和・河内の— 備前・中・後の— 〃 美作の— 丹波の— 丹後の— 丹後・但馬の— 但馬の— 田舎、田舎の民の— 京の—	11 225 13 91 128 90 92 269 268 269 86 88 309 310 87 88 309 121 158 308
余国		309 310
東		88 88
近江		89
加州		206

中国	90 91 111 116 121 218 245 268 269 308
西国	158

以上の内容一覽をかたことと比較すると、
 1 とりあげた語は殆ど名詞
 2 それも殆どが発音訛である
 3 故実論、名目論等に乏しい
 4 古典や先人の言を引用することが少ない(左表の程度)
 } など単調であり、更に

○浮世鏡 第三に引用された古典

条	73
浄板	124
根清	126
六ある書(名義抄)	129
和名(抄)	180
遊仙窟	268
佛書(蓮如御文章?)	
詩經(大雅、皇矣)	

○浮世鏡 第三に引用された人名

条	1
次	31
秀白	33
関安(上人)	66
河法	67
弘法	68
伝教	69
元三	70
牧溪	70
聖一	70
万靈	70
慈鎮	116
暗太郎(仮名)	138
癩五郎(仮名)	243
(弥勒佛)	

5 エピソードと言ったものが無い

6 採集方言の範囲は狭いが、中国地方に関する方言はかたことより広く多い。(あげられた中国地方方言の語彙、また音変化をとりあげる傾向などより察して、著者は播磨か備前あたりの出身者か?とも推察される。)

三、「かた言なをし」の類書の簇出

元禄を迎えると重宝記と称する書が頻出し、多くは「かた言なをし」を取り上げるが、その走りに武者物語がある。

1 武者物語(また同内容で、武者物語之抄と題する四冊本もあり。) 三冊 松田秀任編 承応3(1654)序 刊行は元禄12(1699)年

古き侍の物語に曰、……言葉なども幼少なる時は、かへるをば。かいるといひかにをバがにと云……

と24項のかたことを挙げているが、その中の12項、即ち半分がかたことの記事と一致する。

2 重宝(調法、調宝とも)記の類

イ 不重宝記 元禄4

ロ 男 〃 〃 6

ハ 世話 〃 〃 8

ニその他 女〃(5)、年中〃(6)、武家〃(7)、諸人〃(8)

重宝記の種類については、

……当時重宝記と題する書十有余種あり(男重宝記の序)と苗村丈伯は書いている。

かたことの系譜(その一) (付) 貞室(正章)年譜

重宝記の性格については、

重宝記は便覧とは言っても辞書とは云ひ兼ねる。(岡田希雄「立命館文学三巻8号」)

の言が当たっている。こゝではイロハの三者について説明を試みる。イ 不重宝記(不重宝記大全) 苗村丈伯編

今は下巻のみを存するが、その第八「諸国かたこと」は浮世鏡^{第三}よりの抜萃である。

別稿かたことの補遺といわれる浮世鏡^{第三}について一三、浮世鏡^{第三}と不重宝記大全との関連^一参照。

ロ 男重宝記(新版増補男調法記—元禄15、なお改題本に錦囊萬代宝鑑—いま端本もあるという。) 苗村丈伯著

大田栄太郎氏に「男重宝記と浮世鏡との比較」(国語と国文学17巻11号)という勝れた論文がある。今こゝでは男重宝記の「日本諸国詞づかひ」、「かた言なをし」の二章の大半が、浮世鏡もしくはかたことよりの引用であることを、数字面で表示しておくに止める。

男 重 宝 記		浮世鏡 ^{第三} と類似する項		かたことと類似する項	
日本諸国詞づかひ	38項	10		5	
かた言なをし 語	87語	55		33	
〃 重言	15項	0		0	
〃 詞	4項	1		4	

男重宝記の序文で、丈伯は

……先書になきことどもを余が若年の比より聞おぼへたるまゝに書あつめ童男の知りて重宝とするもの也

と言つたが、右の表を見るとやはり先人の糟粕を舐る結果となつてゐる。

八世話重宝記(編著者未詳) 五卷(享保年間に出た後刷本、例一東大本、及び延享5年刊本、例一国会図書館本は俗語故事談と改題したが、同じく五卷。)

この書、序文を含めて全般にかたことと一致する項が少なくないが特に各部(いろは順)の末におかれた「世話のかたこと」は、その大部分がかたことよりの抜萃である。巻一「い」の部を例にあげる。

十五 世話のかた言

一 印地といふべきヨめんちん 一 石櫓といふべきヨ石かけ 一
 忌明をゆみあき 一 茨薔薇ヨいばらしやうべん 一 囲炬裏ヨゆる
 り 一 沃懸ヨいつかけ 一 椅子ヨゆす 一 守宮ヨやもり 一 盤梨ヨ
 いばなし 一 いつもヨいつつも 一 一といふヨいつち
 以上あげた11語はかたことの32 256 627 435 515 26 625 521 456 529 128に該当し、全
 11語が一致する。

「かた言なをし」の語について

浮世鏡 第三はかたことを先ずあげて次に之を直す型を採り、男重宝記は「かた言なをし」の一章を特設したが、その後も音曲色菓籠に「おんど片言直し」あり、俗字節用指南車は「片言直し」の項を設けて凡そ150語をあぐ。この外にも女蒙求艶詞に「女中嗜言ふまじ

き言葉」の節を設けて51例、^{片言}指南所は形を変えてアテ字とかた言を説く等、「かた言なをし」の後続書は多い。(佐藤鶴吉「片言直し」方言四卷7号参照)

備考 片言を「片言なほし」としたのは、明治二十六年出版の俳諧文庫第二編附録の大野酒竹の俳諧年表が或いは最初かも知れぬ。

と「新村出 古典全集本かたこと解説」にある。いま東大本のかたこと(角田竹冷蔵書)は帙の表題が「片言なほし」とあるが何れが何れに據りしものか。

- 3 諺草など俚諺書との関連
 - 4 浪花聞書など方言書との関連
 - 5 訓蒙、便蒙書などにみる関連
- は、別稿に譲る。

四、徳川後期におけるかたこと

1 「カナ、ホシ(カナ、ヨシ)といふ書」として引用されたかたこと
 (1) 諺苑 (大田方 1759-1829 編いろは順) に「カナ、ヨシ」として引かれたかたこと

引用されたかたこと条	760
諺苑の部イハニ	768
	769
	771
	772
	766
	775
	785
	786
	788
	780
	755
	795
	756
	791
	770

ウノ	765
	759
	790
ク	764
ヤ	783
コ	763
テ	792
ア	13
	758
	782
	4
	778
	789
	774
	797
	761
合計	32項

ホ	40				
マ	785				
ミ	134				
ム	398				
メ	770				
モ	791	48			
ヤ		235			
ユ	108				
ヨ	313				
ラ	783				
レ	78				
ロ	795				
上		393			
下	579	636			
巻	73	365			
総計	1	3	36	84	

計 124回

三 163
 四 236
 五 246
 661 540 288
 686 569 290
 753 573 292
 800 583 293
 593 296
 297
 298
 333

となり、「一卷闕たり」というのは巻二であることがわかる。
 因みに右の一話一言の巻8の書かれたのは、天明8〜寛政2
 (1790)の間、と自註がある。

五、徳川時代かたことが広く読まれた理由

かたことは慶安三年刊行以来、自らも版を重ね、抜萃本は次から次へと改題しながら板行普及した。元禄以後は「かた言なをし」の形で重宝記その他にとり上げられ、西鶴の洒落本、京伝の黄表紙の類にも觸れられるに至った。幕末に於ても「カナ、ホシ」の書と目せられ、引用を見たことは既に述べた。かたことが語学書であり、固い書物であるに拘らず、かく広く読まれた理由は何か、を考えて見る。

1 慶安4年(かたこと刊行の翌年)三代將軍家光が没する。幕府は世情に鑑み、従来の武断を緩和し文教政策への移行を図る。大きな政治の転換であり、かたことのような書物の出版が廻って来たこと。

2 出版事業が漸く軌道に乗り、かつ幕府の文教政策を受けて、教育的出版が盛んとなる。

開祖家康は馬上で天下を取ったが、「高帝…曰、乃公居馬上得之。…賈曰、馬上得之、寧可下以馬上治之」。〔漢書陸

備考。使用したのは名著刊行会の増補活字本で、アイウエオ順に編成替えしたもの。

増補本に、ソの部に、俳諧嘉多言として49条を引いているが之は増補分の故に算入せず。

俚言集覽に「カナ、ホシ」と明記して引用されているのは右の表記の124回。但しこの外にも、内容や文章の面で一致するものは多数あり。

2 一話一言(太田南畝著)に引用されたかたこと

巻12に「或書の中に「題号不見」として、一、人と雑談し待る時…など22項を引き、その終に、

是書題号も作者の名もみへず、慶安三庚寅曆応鍾下皖日書之 荒木利兵衛刊行と末にあり、表紙にはれる上紙もやぶれて落てはづかしの森としどけなくかきてあり、若此書の題号か、全部五巻の中一卷闕たり。

其後此書を市に閑待りしに、かた言と題号ありき。

と見える。引用の22項を整理すると

一 12 20

賈伝)を信じ、統一後は文教政策を目論み、早くより教育に着目、出版にも努力している。

・日本語の歴史(5)近代語の流れ321べ)に拠れば、慶長・元和の頃より営利の出版書籍が出現し、元禄期に至る70年間に毎年平均100部を刊行。その出版物は、

寛文10年	百分比	元禄5年	百分比
佛書	一六六一部(43%)	二七〇六部(38%)	
儒書	八七六部(23%)	一四七六部(21%)	
医書	二四七部(6%)	四四二部(6%)	
仮名書	一〇四九部(27%)	二四六一部(35%)	

という。

3 室町期から俳諧連歌が興隆し、徳川期は大衆の中に広がり、多かれ少かれ学ある人々はこゝに集中した。貞門、談林の後、元禄以降の俳壇は正風が風靡するが、正風を中心は俳聖芭蕉である。その芭蕉が、正風に近きの故を以て貞室の俳諧を評価したので、勢い蕉門全般に貞室は珍重された。

芭蕉は例えば笈の小文(芳野紀行)で、鹿島紀行(須磨の浦の条)で、奥の細道(山中温泉の条)で貞室をとり上げている。いま笈の小文(芳野紀行)を引くと、

よし野の花に三日とままりて……あるは摂政公のながめにうば
られ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是はくくと打なぐりた
るに、われはいはん言葉もなくて……云々

西行と並べて貞室をあげ、「是はくとはかり花の芳野山」と貞室が詠んだから、もう自分は言う言葉もない。と言った書き方は

かたことの系譜(その二)(付)貞室(正章)年譜

ひどく貞室を持ち上げた書きぶりである。

蕉門で珍重した例の一、二

・正風論(加藤原松)に、「(貞門の中で)貞室一人正風を探り当て、姿情の二つに心付けるにや。」

・曠野(荷兮)は蕉門諸俳人の句集であるが、時に先輩故人の句も引く。その引例は

玄旨法印1 宗祇1 宗鑑1 守武1 宗因1 貞室4 西武1
季吟1

である。他が1句であるのに、貞室は4句で、先ず巻頭の句が

これはくとはかり花の芳野山 貞室

であり、以下

我等式か宿にも来るや今朝の春 〃

おもしろうさうしさはくる鶉繩哉 〃

いさのほれ嵯峨の鮎食ひに都鳥 〃

と合計4首も入集しているのは確かに目立つ。

貞門・談林を通じて蕉門では貞室は特別珍重されたのであった。

要之、上には幕府政策の文教重視、中には時勢の推移転換、そして下には俳界における芭蕉の評価、蕉門の珍重などが重なって、貞室の声価が上り、従ってその著かたことの真価も高められ、持続したのである。

(付)貞室(正章)年譜

名 正章まさあきら 通称は鑑屋かき彦左衛門 貞室は薙髮後の併号。時に「室」と自らも云い、他からも書かれている。又一壘軒、腐俳子。

業 紙商 「副紗物」(棕梨はくり一雪)の序に「紙屋の何かし正章といふ者」とあり。

住所 「洛の貞室」と奥の細道にあり、京都は三条に住む。俳家大系圖(生川春明)には「三条通梅忠町ニ住ス。」とあり。

編著書 百韻自註 独吟千句 貞徳終焉記 氷室守 五条之百句

一名雪月花 玉海集 同追加 片こと 附合大全(この書は池田是雄の玉くしげに見ゆ未刊のまゝ佚したか?)

1610 慶長151才 生まる。(没年より逆算推定)

1618 元和4 8才 母(妙喜禪尼)没す。

1625 寛永2 15才 貞徳の私塾に入る。

貞徳終焉記(承応2年作 正章、時に44才)に「……やつがれいかなるすくせにや、いとわらはよりなれつかふまつりて、ことし二十九年、この道にあしきし入ては二十六年一日もその御こころにたがはず、……」とあり。

1628 寛永5 18才 俳諧の道に志す。

奥の細道(山中温泉の条)に「洛の貞室若輩のむかし爰に来りし比風雅に辱しめられて、洛に帰て貞徳の門人となつて世に知らる。」とあり、この話は歴代滑稽伝や俳家大系圖など

諸書に伝えられる。事実とすれば、貞室の十七、八才の頃の語であろう。

1633 寛永10 23才 大子集刊行。(貞門句集の第一書 正章の入集句7)

始め野々口親重(立圃)、松江重頼(維舟) 両人の発意によるが、編集の段階で意見が衝突し、大子集は重頼が単独編纂して刊行。親重は対抗して、同じ構想の下に(但し句数は約倍加) 同年に俳諧発句帳として刊行。(この事件で両人は貞徳より破門される。)

1642 寛永19 32才 鷹筑波刊行。(山本西武編 貞門句集第二書 正章の入集句4)

1642 尼廿五回忌独吟百韻に自註したもの。

貞徳永代記(中島随流著「元禄5」)に、

惣別重頼、貞徳と不和なりければ、やくもすれば貞室といども相けり。貞室母の追善の百句して、自註仕たりしを悪みて散々非言の書を板行(この書、いま不明。或いは後の馬鹿集に追加の懲罰集の中の「独言を指すか。其返答又板行(この書、いま不明。或いは「氷室守」を指すか。中に百韻自註の句の弁護の文あり。す

とあり。之を俳論論争の鎗矢とする。

1645 正保2 36才 重頼の毛吹草(七巻―正章入集句57)出る。

3 37才 正章門の池田正式が「郡山(古保理山)」を出して毛吹草を難す。正章も「氷室守(四冊本)」を著わし

毛吹草を非言する。

1648 慶安 1 39才 正章千句貞徳判者 横本一冊、千句独吟之俳諧貞室作者 また俳諧千句とも) 出る。

季吟編「山之井」開板(正章の入集句49)

1650 慶安 3 41才 かたこと(五卷五冊) 刊行。

1651 慶安 4 42才 8月、点業を許さる。

貞徳終焉記(正章著 承応二年)にいう、

又二とせあなたのはづきに、俳諧の判詞をこひ侍る人あらば
点を合せよとゆるしのふみ下して、やがてその竟宴を花開に
てとりをこなはせたまへり…。

貞徳永代記に、

八月、柿園あしの丸屋にて一会興行有けり。是は山本西武と

安原正章と兩人に批点ゆるし給へる饗宴の会也。発句、

天長く千人ほむるや秋の月 貞徳

ふかき紫苑の花の夕露 貞室

鳩からす紅葉ぬ松に孝見えて 西武

1651 慶安 4 42才 崑山集(雞冠井合徳編 貞門句集第三書正章

の句なり。) 撰

1653 承応 2 44才 3月、重頼「馬鹿集 崑山集批言」(五卷一いま

第一巻欠)を編し、崑山集を難す。

1653 承応 2 44才 紅梅千句興行(有馬友仙主催) 第一梅

紅梅やかか銀公のからごるも 長頭鷹

翠の帳と見ゆる青柳 友仙

堤つく春の日々記かきつけて 正章

と第三句(門下の筆頭が担当する)を正章がつけている。

1653 承応 2 44才 8月22日貞徳発病、11月15日没す。(83才

明心居士 上鳥羽の日蓮宗実相寺に葬る)

正章に追悼の独吟百韻あり、また貞徳終焉記を記す。

1653 承応 2 44才 この年、父親没す? 玉海集(四)にいう、

師にも親にも別れ侍りしとのくれに世中よろつあちまなか
りしかは

わらはまて歎きとり交るとし木哉 貞室

備考 玉海集の卷二に、卯月初つかた祖父覚知菴うせたまひし時

命にやかかへてきかれし時鳥 貞室

とあるも、その年次は推定できない。

1654 承応 3 45才 歳旦、正章は次のような詞書を附し、安靜、

季吟と共に三物をやっている。

いにし年長頭丸より俳諧の道ゆづりはの名をうけし事、人氣

なき身のかざりわらともおもひなし侍る心を

接とめてけふぞめいぼくの花の春 正章

さくは目出たき梅の一枝 安靜

西の対ひんがしむきは雪解て 季吟

(滑稽太平記)

通俗に貞室は「花の本」二世を継いだ者と言われるが、彼が
俳諧を継承した確証は無いとも言う。かくて貞室が俳諧を譲
られたとする宣伝は、次項の慰勸集(重頼)で、また後年の
茶杓竹(一雪)から、強く非難攻撃されるのである。

1654 承応 3 45才 3月、重頼慰勸集を編して馬鹿集の追加(第

かたことの系譜(その一)(付)貞室(正章)年譜

6卷)として出し、貞室の右の歳旦三物を蔽しく難ず。曰く
詞書に俳諧の道長頭丸より伝受しとハ姉響も合点か 我こそ
長頭丸の跡を接とめてと田舎遠国までしらせん謀なるへし
誠にゆるされもなきを偽て申せし事なれハ長頭丸孫子。をさ
へたほんさまじや 京童子の落書に

はななうて何の匂ひをかきやどの
めんばくなしの木をもつけかし

又発句

接とめてめんばくなしやはなひしけ ……云々

右の「鼻ひしけ」なる悪口は、貞室に対し重頼が屢々使用
した語で、貞徳永代記に、

或時重頼、貞室のはなのすこしひくかりければ、

朝がほの日まけをしてや鼻ひしやげ

として貞室方へ点取にやられけり。

また俳諧家譜(千載堂丈石編 宝曆一刊)には、

正章自祝而作歳旦句二曰 接とめて今ぞ名木の花の春

重頼翻二作斯句二戯曰

つきとめて今ぞめいわくの鼻ひしげ 正章前年為二瘡毒一撰二
鼻根一。故呼之若と此

また感歎集は俳諧自註の貞室の句、

第三

雲間より盗人かんとうあらはれて

をとりあげ、かたことと関連させて非難する。曰く、

自註に俳諧の第三仕立やうかやうなるをよしとやせんと過言
たり、さありといへとも寺に不足あり 無用の過言九思一言

又よからぬ加多古土を板行し かんとうハ如何

備考 正章の名が、貞室と変るのは貞徳の没後、承応三年の頃

から、のようである。之も貞徳の俳統を継いだ、とする

意識からであろうか。(貞徳門下の七俳仙、その他直門

の高弟の中には、貞を名乗る者は貞室以外には無い。)

1654 承応3 45才 9月11日一子元次没す。(15才?)

元次(名からは次男であろう。長男は或いは早世したもの

か。)に就いては、かたこと序に「さて(廿年)すき持るこ

ろ独の子もたり」とあれば著者31才頃の出生か。貞徳終焉記

に、

〔承応二年〕かななつき〔十月〕…、八日元次をみてまふ

で待るに…」

と父子連れ立って貞徳の病床を見舞った記事が見える。玉海

集には元次の句は8、外に附句2が入集。正章子十才、正章

子十一才、正章子十三才、或いは正章子十四才との肩書があ

る。玉海集(卷三)に曰く、

野子元次病中祈禱九月九日

百薬の重湯にくむや菊の酒 貞室

九月十一日の夜元次うせ侍しその枕上にこのほとまで詠し

菊の花のうつろひて侍りけるをみて

菊やその枕に残るくすり酒 貞室

承応3 45才 先師一周忌の追善に、

1654 教とるや弟子等は数珠の玉散 貞室

(玉海集四)

1655 明曆1 46才 先師三回忌に、

雪になく溝三歳やわかなみに 貞室

(玉海集四)

1656 明曆2 47才 玉海集(貞室編) 7巻 貞門句集(第四書) 刊

行。作者六五八人 発句数二、六二〇余 付句数五八〇余。

1663 寛文3 54才 匿名で「五条之百句」を刊行し、貞門の諸俳

人(貞徳 立圃 維舟 令徳 西武 貞室 季吟 安靜 可

頼 正信 恵佐 梅盛の12人)を評判し、自らを正統化する。

中に曰く、

貞室 貞徳門弟也

貞徳在世死期までつかへられし人也、此仁の好風体先師翁の意に少しもたかはず、よく習入たと見えたり、……

老年にならるゝにしたがひて、先師の句の面影に露たかはず、……師も又其心さしをよみしことも、翹く敦門弟の内此仁に誹道の伝受三巻の書并に秘事残らず伝へて、云々

1663 寛文3 54才 棕梨一雪、茶杓竹(三冊)および追加の副紗物(一冊)を刊行し正章を難す。(主として正章千句の非難)

1664 寛文4 55才 門人貞恕(犬井氏)に「蠅打」(追加ともに五冊)を出させ、右の非難を逆襲する。

1664 寛文4 55才 この年重頼も佐夜中山集(六冊)を出し、巻

五に「鼻欠猿」と題する文章を掲げ、貞室を非難す。

備考 右の茶杓竹と蠅打との論争の中でかたこと非難に関する部分の一例をあげる。

かたことの系譜(その一) (付) 貞室(正章)年譜

伯父者人の謀叛は早く頭れて

文字餘り打越たり、是程のさし合も覚えられぬにや、又伯

父者人といふ事いかゞ、者の字ハ人とよむ也、しからハ重

言也、此作者かたこと双紙といふ物をせしが、其内にハ伯

父者人などゝいふハかたこと也と書たり、然ハいつれをよ

しと定るにや、……

(蠅打の反論)

かたこと双紙にハ、おぢじやものはわるしと有、汝ハいか

ひとへうものや、物ミるとも念を入よ、者の字人とよむ也

然共くるしからず

(古典文庫122 「貞門俳論集」77~78ペ)

1666 寛文6 57才 貞室は狂歌も嗜んだが、古今夷曲集に狂歌4

入集、この年刊行の後撰夷曲集に狂歌2が入集している。

晩年は「琵琶を樂しむ」と蠅打序に見え、また草稿・色紙の類

は集めて焼いたともいう。

1673 寛文13 64才 旧冬よりいたはりつよければ、明る年の歳旦

(九月、延宝と改元)

来る年のおも湯につなぐ命哉

……諸人此句を甘心す。(貞徳永代記)

二月七日没す。いま墓は西本願寺大谷本廟墓地(鳥部山大谷

墓地)に在り。辞世の狂歌、

今までは目見へせねども主人公

八八といひし年もあきけり

初七日の二月十三日、季吟は

万事は皆ひがん桜よ一さかり
を立句とする追悼の百韻を手向ける。(季吟廿会集)

その門系につき、歴代滑稽伝にいう、

其比貞室門人あまたのうち、花の本を此貞恕に譲る。其後血
脈相統の弟子なくて、花の本は此貞恕にて絶たり云々

1675 延宝3 貞恕、貞室の三年忌を営む。(新玉海集)

うくいすよ、そちも泪の瀧こもり 他二句あり。

1679 延宝7 貞恕、新玉海集(七冊)を編す。一序によれば、貞

室が、玉海集、同追加に継いで新たに選句していたもの(先
師判)に、「遺志を受けた貞恕が追加選句(愚判)して纏め
たもの。内容・体裁みな玉海集に倣う。板行されたのは貞享
二年(貞室十三回忌)か。

1685 貞享2 貞恕、貞室の13回忌に悼句あり、信徳、政安も手向

く。(新玉海集)

1686 貞享3 かたことの後刷本第二版刊行。(高橋清兵衛刊)

備考 俳界は貞門から談林を経て、やがて正風時代を迎えるが、没
後も貞室の句は正風に近きの故に、蕉門に珍重された。(177
べ参照)